[シンポジィアム] As You Like It

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 太田, 範子, 西岡, 淳子, 和田, 彪, 合田, 初穂, 宮崎, 信子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/37451

シンポジィアム

As You Like It

1. Atmosphere　　2. Women
3. Clowns　　4. Puns, etc.

1. その Atmopshere について

太　田　範　子

As You Like It は Shakespeare が悲劇に先立って書いた *Two Gentlemen of Verona* や *A Midsummer Night's Dream, The Twelfth Night* などと共に romantic comedy と称される作品である。*Two Gentlemen of Verona* で示された性格描写の試みと，神秘的な抒情性の盛りこまれた *A Midsummer Night's Dream* に続くこの作品には setting の面にも，character の面にも，plot の面にも Shakespeare の力量が最高に発揮され，彼の romantic comedy の一種の atmosphere が最もよく高められていることは広く認められている。

開幕と共に始まる De Boys 家の遺産横領にからまる兄弟争いや，Frederick の兄公爵追放と所領奪取の騒動は，変に生々しくこの drama を語り出して来る。しかし一方，相撲大会に芽生える Rosalind と Orlando の恋が，楽しい明るさの灯をともしてくれ，我々は *A Midsummer Night's Dream* の初幕で二組の恋人達に感ずると同じような「全てが円くおさまるだろう」という安心感に似た希望を抱くのである。実際，幕が変って次に我々に紹介されて来る老公爵の Arden の森を賞讃する言葉によって，その安心感ははっきりと裏打ちされる。

> Hath not old custom made this life more sweet
> Than that of painted pomp? Are not these woods
> More free from peril than the envious court?
> Here feel we but the penalty of Adam,
> The season's difference, ……　　(II. i. 2)

そして Arden の森は，この drama の happy-ending の望みを暗示してくれるばかりでなく，独特の atmosphere を生み出すのに大きな働きをしている。この

Arden の森に関連して，*A Midsummer Night's Dream* の atmosphere に大きな意味を持っている森が思い出されるが，二つの atmosphere は決して同じではないということは容易に感知される。Arden には Athens の森のあの神祕性はないし，又 drama の展開される時も妖精達の現れる夜ではない。そして追われて来た人間は夢を見るのでなく現実的な生活をくり広げている。又ここには Puck が使った "love-in-idle-ness" とよばれる花もない。しかし，例え Arden に我々を夢の世界に誘う Puck や Oberon や Titania や妖精達の神祕性はみられなくとも，現実には程遠い夢幻性はみられるといえる。即ち，そこでは俗界の争いや騒動は忘れられ，老公爵が言うように，

> And this our life exempt from public haunt,
> Finds tongues in trees, books in the running brooks,
> Sermons in stones and good in every thing. (II. i. 15)

そんな生活を送ることが出来るのである。又そこには恋が美しく花開いてゆくことも出来る。Rosalind と Orlando, Celia と Oliver, Audrey と Touchstone, Phebe と Silvius という四組の恋は，素撲な田舎暮らしの中で，何に妨げられることもなく育てられている。そこには *Two Gentlemen of Verona* の Proteus のような心の迷いや，彼を追う Julia の不幸は微塵もない。*A Midsummer Night's Dream* の Puck の失敗による Lysander の心変りや，Hermia の嫉妬や Helena の怒りもない。唯，男装した Rosalind に対する Phebe の恋がおかしみをそえているが，やがてこの八人は Hymen の縁に結ばれてゆく。そして更にこの夢幻性に加うるに，美しい唄の数々がこの drama を飾っている。

> Under the greenwood tree
> Who loves to lie with me,
> And tune his merry note
> Unto the sweet bird's throat,
> Come hither, come hither, come hither:
> Here shall he see
> No enemy
> But winter and rough weather. (II. V. 1)

と Amiens の歌う唄は Thomas Hardy の作品名にもなり，特に有名であるが，これらの唄は Arden の魅力を増し，この drama を fantastic な atmosphere に包んでいる。この他にも fantastic な働きかけは setting が空想上のものであるということにも影響されているし，或はもっと数字的時間的な場数

の上からの影響もあるだろう。こうして夢幻に満ちた Arden は fantastic な atmosphere をつくり出して大きな役を演じている。しかし Arden は絶対至上の楽園では決してない。Jaques は二幕一場で，国家や都市や宮廷を毒舌で突き刺したと同じように森の生活も罵っている。Touchstone も森の暮しは気に入っていると認めながら，現実の生活の不便さや侘しさや不自由さを不満としている。

> Truly, shepherd, in respect of itself, it is a good life; but in respect that it is a shepherd's life, it is naught. In respect that it is solitary, I like it very will; but in respect that it is private, it is a very vile life. Now, in respect that it is in the fields, it pleaseth me well; but in respect it is not in the court, it is tedious. As it is a spare life, look you, it fits my humour well; but as there is no more plenty in it, it goes much against my stomach. (III. ii. 13)

こうして Shakespeare は見事な技で田園生活の笛を奏し，又すぐにその不自然さや粗野を見抜いてゆく。そのために彼が描き出した Arden は——それからかもし出される全体の atmosphere も——それが単なる桃源境や或は *The Tempest* の島や，Athens の森のような超自然界に終らず，fantasy にあふれながらも，あくまでも realism に足をふまえたものになっているといえよう。*The Two Gentlemen* of Verona において大きく成長したといわれる性格描写の力は，この作品でもいかんなく発揮されている。公爵から羊飼にいたるまで，一人一人が見事に描き分けられ，何の無駄なくこの各自の役割を演じている。中でも二人のヒロイン，Rosalind と Celia や二人の道化 Jaques と Touchstone には *A Midsuwmer Night's Dream* にも描ききれなかった個性が描き出されている。この四人は又 *The Twelfth Night* の人物にも比較され，Touchstone は Feste に，Rosalind は Viola に Celia は Olivia に似ているとされるが，全体の atmosphere には *As your like It* により fantastic, romanticなものがあるが，一方優雅さの点では劣っているといえるかもしれない。実際にこれらの人物は atmosphere にどう働きかけているだろうか。ごく大まかに常識的に考えられる点だけでも見ておかねばならない。William と Audrey は，田園の点景として全く素朴な味をつけ加えて，この劇の atmosphere に寄与している。又 Rosalind や Celia の美しさは，それだけでもこの劇の romantic な atmosphere には十分であるが，それに加わった彼女達の直情的で快活な性格や，誠実で可憐な性格も忘れられない。*British Drama* において Nicoll は「realism と fantasy という相容れない特性が，Shakespeare の

comedy において互いに結びついているのは，彼の comedy を左右している humour のためである」と述べている。——即ち

This humour, a union of intellect and emotion, irratiates both the character and the scene, making romantic the ordinary things of life and making realistic the most imaginative and improbable characters and events.

というのである。この他にも realistic な atmosphere を作り出すのに働いている性格の要素はみられる。この劇全体に照らし出されている柔かい皮肉な懐疑の情緒である——あの Hamlet に一脈通ずるといわれる Jaques の有名な「人生七つの時代」の悲観的な人生観や，或は彼の苛烈な諷刺と批評によって，私達は fantasy の世界に飛んでゆこうとする我が身の足を否が応でも踏みとどめ，現実を振り返ってみずにはおれない。実際，大団円に一人

To see no pastime I: .... (V. IV. 201)

といって修道院の生活に入ってゆく彼の言葉には，happy-end の結末を手放しに喜べない冷徹なものが感じられる。

一方開幕と同時に私達の心を不安にした兄弟争いや，お家騒動が Arden の森ではすっかり忘れられて，どういう原因から森の生活が始まったかを忘れそうになるが，恋が結ばれる大詰の Jaques de Boys の登場によって，現実へ引きもどされる。彼が伝える Frederick 公の悔い改めと領地譲り渡しの報せに，森に来た時には

I would not change it (II. i. 18)

と森を好んだ老公爵の決意も空しく，宮殿生活に戻って行く。

こうして，setting や character や plot 等は fantasy と realism の間を往き来する。そしてこの往来と重なり合いが，余りに素早く余りに複雑なのに驚きを覚えもするが，それは当然かもしれない。何故なら，Shakespeare の絶対至上を認めない文学態度——即ち「一つの見方を提出すると，次には必ずその弱点を指摘する第二の立場を提出して来る。しかしその第二の立場も決して完全なものではなく，第三の立場によって批評される。そしてその第三の立場は第一の立場の弱点を補ったものである場合もあり，結局我々に与えられるものは可能なあらゆる角度から照射された姿である」——という態度がここにも現れていると思えるからである。かくて例えば，Arden の森の魅力による fantasy に加うるに，Jaques の皮肉まじりの melancholy が生み出すこの劇の柔らかな憂鬱とそれが我々の心に想い起す realism が，相合わさってこの劇の atmosphere をすぐれたものにし，同時に背景や人物や筋立といった fantastic

な一つ一つの要素が我々を楽しませてくれながら，決して realism から足を離してしまわず，補い合い強め合って独特のものを作り出しているといえよう。そして私達が溶け入って一人入り込む世界は，ピアノとバイオリンの二重奏のように，ある時には fantasy が強く，ある時には realism の大きく響いてくる「みどり色」のただよう世界である。

2. その女性について

西　岡　淳　子

Shakespeare によって描かれた女性も初期の劇，*The Comedy of Errors* の Adriana, *Midsummer Night's Dream* の Helena や *The Two Gentlemen of Verona* の Julia は，自分を毛嫌いする男をはしたないと思われる程，追いかける女であったが，やがて Shakespeare にまとまった女性像が出来てくる。

①男性一般が理想と憧憬する純情な女性

②wit combat の戯れで男性を相手にまわして少しもひけを取らない女性の二面が後期喜劇に属する *As You Like It* の女主人公 Rosalind には上手に溶け合い，時，所をかえて縦横に発揮されている。

Shakespeare は Rosalind にどのような考えをこめたのであろうか。これを知るために先ず当時の社会情勢に遡って考えて見よう。近代とはいえ，民衆の中にはまだ中世意識が強く残っており，従って恋愛観も騎士道精神にのっとっていたわけである。この点 Shakespeare の必ず結婚に終ることを前提にした恋愛はたぶんに異なる。この中世の地につかず現実に立脚しない恋を打ちすてて，現実を凝視した考えのもとに，Rosalind を知性豊かな女性に描き，中世の恋の愚かさを分析する批判力を与えている。物語が展開されるに従ってこの realism は大きく深く根をはり，その色を濃く呈してくる。彼女は非常に realistic ではあるが，Orlando を見た瞬間から結婚の相手と自分勝手に定めてしまう romantic な面もあるということは見逃がせないと思う。この直情的で，機智に富んだ女性 Rosalind の考え方が即ち Shakespeare の根本思想であって，これを強く明確に浮き出させるために Orlando の romanticism や Phebe の pastoralism を描き出したと見るのは私の独断だろうか。

では Shakespeare 理想の女性 Rosalind について見ることにしよう。

The poor world is almost six years old, and in all this time there was not any man died in his own person, videlicet, in a love-cause. (IV. i.96—99)

と恋人 Orlando に語り，更に続けて

Troilus had his brains dashed out with a Grecian club; yet he did what he could to die before, and he is one of the patterns of love; Leander, he would have lived many a fair year, though Hero had turned nun, if it had not been for a hot midsummer night; for, good youth, he went but forth to wash him in the Hellespont and being taken with the cramp was drowned. (IV.i. 99—107)

と平然と述べている。更に

Men have died from time to time, and worms have eaten them, but not for love. (IV. i. 109—110)

と彼女は決して中世の love など信じない。又

Love is merely a madness. (III. ii. 414)

と同様に Orlando にも理性的な面を示している。このように Rosalind は理性的な勝気な女性であるが，反面詩人 Shakespeare の憧れる純情な女性の面を兼ね備えているのである。公爵の前で公爵のお抱え力士 Charles と Orlando が相撲をした後で，Rosalind が一目会っただけの Orlando を慕って黙りこんでいるのを見て Celia は以下のように問う。

Cel. Why, cousin! why Rosalind! Cupid have mercy! not a word?
Ros. Not one to throw at a dog.
Cel. But is all this for your father?
Ros. No, some of it is for my child's father. (I. iii. 1—11)

更に第三幕四場で Orlando が約束の時間に現れないので

Ros. Never talk to me; I will weep.
Cel. Do, I prithee; but yet have the grace to consider that tears do not become a man.
Ros. But have I not cause to weep? (III. iv. 1—4)

第三幕二場で森の木々に掛けられた，Rosalind をほめたたえた短冊の犯人が恋人 Orlando であることを Celia から問かされて

Ros. Alas the day! what shall I do with my doublet and hose? What

did he when thou saw'st him? What said he? How looked he?
Did he ask for me? Where remains he? (Ⅲ. ii. 229–233)

というようなところを見ると，男装をし，逆境に面しても屈しない彼女も根はやはり優しい女性であるということが窺えると思う。Rosalind は純情な女性を根底にして明朗快活で理性的な面と wit に秀でた女性という要素がよく溶け合い，それが根底になって，純一な性格を覆っている感がある。Rosalind が森で偶然 Orlando に出くわした時わざと見知らぬふりを装って傍目で Celia に向って

Ros. I will speak to him like a saucy lackey and under that habit play the knave with him. (Ⅲ. ii. 309–311)

彼女の持ち前の wit が芽を出して来るのである。次に見る Orlando との対話にもその wit は思いのままに飛びまわり，彼に対する愛情が増せば増す程この wit は躍りまわり，男性の Orlando もたじたじといった感じである。

Ros. I will weep for nothing, like Diana in the fountain, and I will do that when you are disposed to be merry; I will laugh like hyena, and that when thou art inclined to sleep. (Ⅳ. i. 155–159)

又彼女の結婚感は決して甘美なものでなく現実の姿を認めているのは次の例

Ros. Men are April when they woo,
December when they wed; maids are May,
When they are maids, but the sky changes
When they are wives. (Ⅳ. i. 149–151)

によってはっきり知ることが出来る。

ここで他の作品におけるこのような女性はとなれば，*The Merchant of Venice* の Portia が想い浮ぶのではなかろうか。Portia は求婚者を辛辣に諷刺する知性の持主である点や，夫の友人を守るために法廷に立って堂々と弁論を振う男まさりの女であり，同じことが Rosalind にも見られるのだが，更に Rosalind には若々しく優しい気持が根底にあるということ，これが注目すべき特徴なのである。

As You dike It 全体を通じて見た場合，お能でいえば，Rosalind を“シテ”とし，“ワキ”に Rosalind の従妹 Celia を持って来て Rosalind に薄い性格——誠実可憐な面——を Shakespeare は補っているのではないだろうか。何時も Rosalind の側で，Rosalind がきつい態度を取った時には柔らげる言葉を，打ち沈んでいる時には朗らかな言葉を，有頂天になっている時には一杯の冷水

をかけるような，だがあくまでも愛情をもっていて介添え役のようで年齢的に見てもしばしば逆であってもよいと思われる程よく気の付くしっかりした女性である。その独特な魅力はそこから来るものであろう。

この戯曲によく似た *A Midsummer Night's Dream* に出て来る二人の女性 Helena・Hermia と Rosalind・Celia との関係を見ると後者の方は前に述べた通り，幹枝の関係であって二個の円が一接点を持つものであるのに対し，前者 Helena, Hermia の方は各々別の性格を持った二個の円が全く接しないで存在する関係にあることを意識させる。Hermia・Helena の孤立円型をA段階とし Rosalind・Celia の接円をB段階とする。これが Shakespeare の女性の発展過程と見た場合，*As You Like It* 以後の喜劇にどのような傾向があるのかということを Shakespeare の女性の development として後日研究する機会を持てることを望んでいる。

最後に結論として，Rosalind は Shakespeare が心中で描いた理想の女性であったということ，Rosalind によって Shakespeare は中世の殻から抜け出し，近代へと移行しつつあった時代に一つの確たる方向付けを果したのだと思う。Shakespeare が Rosalind を愛したように私たち誰しもが彼女に少なからぬ好意を持つことは疑い得ないことだと思う。

3. その道化について

和　田　　彪

Shakespeare は多くの作品に道化を登場させている。そして作品が comedy か tragedy かによって，道化の性質も千差万別である。同じ道化でも As You Like It の Touchstone, Jaques や，Twelfth Night の Feste, King Lear の clown, そして Henry IV の Falstaff と代表的な道化をみただけでも，Shakespeare の作品にあらわれる道化の多趣多様さがわかる。

道化というものは，As You Like It の中で Duke が

> He (=fool) uses his folly like a stalking-horse and under the presentation of that he shoots his wit. (V. iv. 111–113)

といっているように，おかしなしぐさや，おもしろい台詞で観客を笑わせ，そのすきに諷刺や機智の矢を放つものなのである。だから道化は，その笑いによって，段階に分けられるのである。まず，道化そのものが笑いの的となるもの

で，諷刺したり皮肉るだけの知能はない。故に観客はただ単純な笑いを楽しむにすぎないのである。こういう道化は正に fool であって，自分の道化たることも知らぬげに振舞わねばならない。次に前の Duke の道化観を満足させるのが，一般に道化と考えられているもので，笑いと諷刺が調和を保って，より知的な笑いを与え，なによりも，こういう道化は性格が与えられているのである。性格のない道化は他人から笑われるだけだが，性格を持った道化は，他人を笑うこと，即ち諷刺し，皮肉ることができるのである。"Shakespearian Tragedy" で Bradley がその正気を疑うことが困難でないといっている King Lear の clown はこの部類の道化にはいささかアチャラカがすぎるようである。Touchstone はこの部類の道化の典型であるが，Jaques は笑いが弱くて諷刺が強くなりすぎて，bitter な，そして morbid な humour を持つ道化の類に入っているようである。

Rosalind や Celia と共に森に逃げた Touchstone は，道化という特権にものをいわせて，人間の弱点，社会に痛烈な批判を加え皮肉っている反面，自然にわきでるような humorous な雰囲気を自分の身辺にただよわせている。彼のかもす笑いは，多くの quibbles (ex. II. iv. 11−13, 15, III. iii. 6−8, III. iii. 19, etc) である。更に，コトバの遊びとでもいえるような達者なコトバの配列は，宮廷生活と羊飼いの生活を，静かさ，佗しさ，などの点で比較して，胃袋の状態の比較に至っている箇所 (III. ii. 13−31) や，単なる嘲笑から決闘にまで発展する嘲笑の段階の分析 (V. iv. 71−86) の箇所でみるように，知的な笑いを与えているのである。それに又，道化としては当然のことではあるが，Touchstone の当意即妙さはすばらしく，中でも III. ii の替え歌は見事で，元歌が Rosalind 讃美の歌であれば，替え歌は，Rosalind をいくらか皮肉的に歌ったものなのである。こういう単なる「おかしさ」から一歩進み，「おかしさ」の中にも鋭い諷刺を含んだ台詞が彼の身上なのである。Touchstone が一番諷刺の矢を放っているのが女性に対してであることは，少し意外なことである。しかし，Shakespeare の時代に既に Renaissance の波がイギリスにもおしよせ，いろいろな改革と共に，当然女性観も中世のそれとは変ったものになったことを考えてみると，彼の女性諷刺は Shakespeare の女性観そのものであろうと思われる。Shakespeare の AYL にあらわれた女性感は，美人と貞節が両立しないという事実につきるようである。

——honesty coupled to beauty is to have honey a sauce to sugar
(III. iii. 29−30)

——to cast away honesty upon a foul slut were to put good meat into an unclean dish. (Ⅲ. iii. 34–36)
——rich honesty dwells like a miser, sir, in a poor house; as your pearl in your foul oyster (V. iv. 53–54)

恋に明け暮れる AYL で，こういう Touchstone の痛いところを突くが如き女性攻撃がなかったならば，女性崇拝一辺倒の play になってしまったことであろう。

Touchstone の諷刺の矛先は，女性に対するに劣らず，恋愛に対しても鋭く向けられている。恋に狂ったようになっている若い男女の群を見れば，Touchstone ならずとも諷刺したくなるが，

—— we that are true lovers run into strange capers; but as all is mortal in nature, so is all nature in love mortal in folly. (Ⅱ. iv. 54–56)

と述べた Touchstone は，この後で甘ったるい恋愛に最大の諷刺を身をもって行なうのである。即ち，彼は Audrey という田舎娘と結婚することになるのである。結婚の動機を尋ねられれば，

As the ox hath his bow, sir, the horse his curb and the falcon her bells, so man hath his desires; and as pigeons bill, so wedlock would be nibbling. (Ⅲ. iii. 79–82)

と，いともあっさり his desires といい切って，Rosalind と Orlando の結婚の正体を暴露し，ひいては，世の恋や結婚がどんなものであるかをいいあてているようである。道化とはいえ，結婚観をこのようにいい切るあたり，当時まだ残っていたであろう騎士道的恋愛観結婚観の中での，Shakespeare の態度がうかがわれるような気がする。Audrey との結婚を Touchstone は全く realistic に考えており，結婚前にもう離婚を考慮に入れているという徹底ぶりである。

And not being well married, it will be a good excuse for me hereafter to leave my wife. (Ⅲ. iii. 92–94)

という Touchstone は，honesty と beauty が両立しないことに関連して，結婚後の女性の honesty については，

—— As a walled town is more worthier than a village, so is the forehead of a married man more honourable than the bare brow of a bachelor;
——by so much is a horn more precious than to want. (Ⅲ.iii.58–63)

というように，女房の不貞を公然と肯定し，間男をはたらかれた夫の額の角

(horn) は貧乏人だけに生えるものでないといって，上流階級の腐敗ぶりを皮肉り，Touchstone の自嘲とばかり思っていた観客も，知らぬ間に皮肉の矢が自分達の上に射られていることを知るのである。心の中では愛している Andrey のことを，人前では a poor virgin, sir, an ill-favoured thing, sir, といい，自分の結婚を a poor humour of mine, sir, to take that that no man else will. (V. iv. 60—63) と自嘲しなければならないのは，道化という職のかなしさである。

常に現実的な考え方や行動をとる Touchstone は，humour のある人間以上に wit のある人間であるといえるようだ。

次に，Hamlet の前身であるとさえいわれる Jaques をながめてみることにする。レッキとした lord でありながら道化として扱かわれるのは，彼の humour それも bitter で morbid とさえいえる humour のためである。単に humourous な人間というだけで道化とはいえないが，Jaques は bitter humour を持っていると共に，彼の態度そのものが，何か道化的なのである。なによりも彼は常に melancholy であるように見える。自分でもそれを認めて I can suck melancholy out of a song, as a weasel suckt eggs. (II. iv. 12—14) といい，別の箇所では，学者，音楽家，廷臣，軍人，弁護士，婦人や恋人のそれぞれの melancholy ではなくて，

> —— it is a melancholy of mine own, compounded of many simples, extracted from many objects, and indeed the sundry contemplation of my travels, —— (IV.i.15—18)

と普通の人間の melancholy とは違ったもののようにいっている。豊かな人生経験の持ち主である Jaques にしてみれば，この世の中を笑って暮すことなど思いもよらぬことかもしれないが，あまりにもユウウツで悲観的な彼の態度は，少しばかり芝居がかったものだという印象を与える。Jaques 本人はまじめくさってこの世をはかなんだような顔をしても，観客はかえって，その顔にコッケイな感じを持つのではなかろうか。だから Jaques の深刻ぶりが鼻につく人もあるだろう。H. B. Chalton は Shakespearian Comedy の中で

> His psycho-analytic formula of his own melancholy is nothing but the covering up of moral deficiency by a pseudo-scientific explanation of it (p. 291)

といっている程である。Jaques の人生感は All the world's a stage (II. vii. 139) で始まる台詞でうかがわれるように極めて虚無的で人生に全然希望がな

い。しかし，ここまでむきになった，この老人のようなグチは，かえって笑いを与えている。人の一生を七つの時期に分けているが，どれも，皮肉まじりに人間のある時期のある典型を述べている。Jaques は，

> All the men and women merely players:
> They have their exits and their entrances; (II.vii.140－141)

という境地に達しているようである。人間は総て運命という演出家の手によって操られ，生も死も神の手に依存していると考えているようであり，だからどうしても I do love it (＝melancholy) than laughning (IV. i. 4) といわざるを得ないのだろう。

Touchstone は realist であったけれども，この現実を否定したり，厭世家になっていたわけではないが，Japues はこの世の中が悪で満ちあふれていると考えて，

> I will through and through Cleanse the foul body of th' infected world,
> (II. vii. 59－60)

といい，更に又，

> ——we two will rail against our mistress the world and all our misery
> (III. ii. 292－293)

といって，まっすぐこの世をみようとしない態度で，Touchstone のように世の中のある物に対して諷刺をするというのでなく，現世そのものを諷刺どころか否定しようとしているのである。

Jaques はしばしば道化の Touchstone をうらやんで，O that I were a fool! I am ambitious for a motley coat. (II. vii 42－43) とか，Invest me in my motley; (II. vii. 58) というようにいっている。これは to speak my mind (II. viii. 59) が思うようにいかない宮仕えの身を嘆いたものである。しかし，Jaques がたとえ許されて道化となったとしても Touchstone の明るい wit と humour のあふれた台詞がすぐ口から出せたであろうか。

終幕近く，数組の結婚がまとまったときに自分の経験を豊かにするために去ってゆく Jaques の態度は Twelfth Night の Feste が二組の結婚をよそに去ってゆく姿に似ている。しかし，Feste の飄標とした態度に比べると，Jaques のそれは後髪を引かれるような態度である。Touchstone のように他の人々に混じることのできなかった Jaques のどうしてもそうしなければならなかった態度である。あまりにも楽しい AYL の雰囲気に Jaques は唯一人で，contrast

の地位を保っているといえる。

Jaques になると笑いは薄れたが，作者は道化に笑いと共に諷刺，皮肉を与えて，主役の台詞だけでは一面的になる作者のいわんとすることを補なわせていると考えられる。

4. その Puns について

合田初穂　宮崎信子

AYL 中には実におびただしい数の puns が現れる。我々が，ほぼ確実なものとして拾い得たものだけでも70はある。しかもこの puns をよく見ていくと，シェイクスピアはこれらを実に巧みに使いわけていることに気がつく。即ち puns を単なる言葉の遊びとしてでなく，時には気持のよいユーモアを，時には鋭い皮肉を，又時には登場人物の性格までをも浮き彫りにしている。

以下，この愛すべき comedy 中に現れた puns について，気付いた所を述べさせていただく。ここで puns と言うのは，「ユーモラスな効果を出すために，二つ又はそれ以上の意味又は違った連想を示唆するような語の使用法，又は異なった意味をもつ同じ音か又はほとんど同じ音の語を用いる法」(NED. *pun*) を意味している。

Kokerlitz は *Shakespeare's Pronunciation* の中で，「シェイクスピアは二種類の puns を使っている。それらを我々は便宜的に semantic puns と homonymic puns と呼んでもいい。non-semantic puns をさらに jingles と homonymic puns に分類することが出来る。」(p. 57) と述べているが，我々はここでは，puns といわれているものを三つの種類に分類してみたい。第一番目は同音類似語による「ごろあわせ」即ち jingles であり，第二は一語に二通りの意味を持たせる所謂「掛け詞」，第三は「縁語」つまり或る語を中心にしてそれに特殊的，或いは伝統的な関係，或いは縁を持つもの，以上三種を考えてみた。これら三種の技巧は，はっきりと単独に使用されている場合もあるが，度々錯綜して表わされている。そこでこれら三つの技巧を頭においた上で，我々が特に興味を持った箇所を二・三選び出してみたいと思う。

まず第一番目の「ごろあわせ」の例として Ⅲ. iii. ee 6–7 をあげたい。

> **Touch. I am here with thee and thy goats, as the most capricious poet, honest Ovid, was among the Goths.**

ケーケリッツが言っているのだが，(p. 109) エリザベス朝では Goth 中の〔θ〕の音の代りに〔t〕と発音されていた。従って Goth と goat とは同じように，又はほとんど同じに発音されていた。故に goats (山羊) と Goths (ゴート人) との洒落が成立するのである。
この他

I.	i.	33— 33	make—mar—marry—made
	ii.	25— 30	sports—sport
	ii.	58	wit—wither
	ii.	125—128	presence—presents
	iii.	19— 20	hem—him
II.	vii.	52	why—way
III.	iii.	3— 5	feature—features
	v.	133	omittance—quittance
IV.	i.	170	wit—wilt—whither
	iii.	38— 39	Phebe's—Phebes
V.	ii.	114	here—hear
	iii.	13— 16	hoarse—horse

以上ごろあわせとして13箇所を上げておく。

次に第二番目の掛詞であるが，これは三者中最も多く，46の多きにのぼっている。明白な掛詞の例として，II. iv. 65—67 が上げられると思う。シーリア，タッチストン，ロザリンドが話し合っているところへ，羊飼のコリンとシルビアスが通りかかり，クッチストンは女主人達の食物を求めるために，彼等に呼びかける。タッチ「おい，そこの田吾作どん。」ロザリンド「お黙り，お馬鹿さん。あれはお前さんの親類じゃないよ。」

> Touch. Holla, you clown!
> Ros. Peace, fool: he's not thy kinsman.

つまり clown には二つの意味があって，タッチストンが田舎者 rustic の意味で言ったのに対し，ロザリンドは道化者 fool の意味にとって洒落ている。このような掛詞の例は枚挙にいとまがない。以下その箇所を述べていく。

I,	i,	57— 61	villain (1. slave 2. a vail and wicked person)
	ii,	25— 30	sports (1. amusement 2. fall in love)
	ii,	110	rank (1. high station 2. foul smelling)
	ii,	127	bills (1. weapon 2. label notice)
	ii,	145	see (1. 奏でる 2. ひどい目に会う)
	iii,	5— 8	reasons (1. cause 2. intellectual faculty)
	iii,	35— 38	hate (1. to hate 2. ate)

		deserve (1. to merit 2. to do service)
II,	i, 26	Jaques (1. Jaques 2. jakes)
	iv, 11– 12	bear (1. 背負う 2. 我まんする)
		cross (. 十字架 2. 銀貨)
	iv. 16– 20	Arden (1. Arden 2. harden)
	iv. 18	travellers (1. 旅人 2. travailer)
	iv. 52	(peas-) doc (1. pods 2. testicles)
	iv. 57	ware (1. aware 2. cautions)
	iv. 67	betters (1. 目上の者 2. worse の反対の意)
	vii. 26– 28	hour (1. whore 2. hour)
		ripe (1. to grow ripe 2. search for)
		rot (1. to decay 2. to say nonsense)
		tale (1. tale 2. tail)
	vii. 44– 47	suit (1. suit 2. shoot)
		weed (1. garment 2. to rid)
	vii. 72– 73	means (1. mean 2. high sea)
	vii. 100–101	reason (1. reason 2. raisin)
III.	ii. 23	natural (1. native 2. physical)
	ii. 124–129	medlar (1. medlar 2. meddler)
		you (1. yew 2. you 3. ewe)
	ii. 176–177	without (1. not with 2. out side of)
	ii. 258	heart (1. heart 2. hart)
	ii. 259	burden (1. refrain 2. base)
	ii. 303	figure (1. shape 2. number zero)
	ii. 359	courtship (1. wooing 2. court life)
	iii. 3– 5	feature (1. feature 2. faitour)
	iii. 18	feizning (1. imaginative 2. dissembling)
	iii. 31	material (1. full of matter 2. carnal gross)
	iii. 40	sluttishness (1. 服装の薄汚さ 2. 不品行)
	iii. 47– 50	heart (1. heart 2. hart)
	iii. 67– 68	give (1. 親代りになる 2. 与える)
III.	v. 62	foul (1. morally bad 2. ugly)
	i. 89– 91	suit (1. dress 2. petition)
	i. 137–140	take (1. 嫁る 2. catch)
	iii. 68	instrument (1. tool 2. musical instrument)
V.	ii. 40	incontinent (1. at once 2. unchest)
	iii. 4	dishonest (1. unchast 2. not honest)
	iv, 185–199	measure (1. measure 2. dance 3. rhythm)

さて最後に縁語であるが，我々の集め得た縁語は70中10のみであった。その中で割合にはっきりして面白いと思ったのは III. iii. 47–50 であった。おどけ者のタッチストンと田舎娘のオードリとが森中で結婚式を挙げようと勇みたっている。

タッチ「アーメン。おどおどした心の男だったら，こんなことをするのは尻込みするだろうな。だって，ここにはお寺もなくて森ばかり，参列者もなくて，角の生えた鹿ばかりだ。だが，それが何だっていうんだ。勇気を出せ。角はいやなものだが，なくすることも出来ないものだ。」

> Touch. Amen. A man may, if he were of a fearful heart, stagger in this attempt; for here we have no temple but the wood, no assembly but horn-beasts. But what though? Courage! As horns are odious, they are necessary.

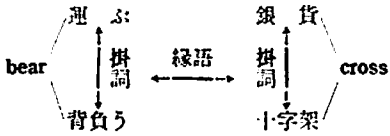
この heart は「牡鹿」の hart に掛けられていて，stagger → horn-beast(deer) → cuckold の horns という風に縁のある語が聯想に沿って連らねてある。cuckold は不貞な妻をもつ夫の意で NED に詳しく説明されているから参照されたい。エリザベス朝では日本と違って妻を持った男の額に角が生えたらしく，タッチストンは「村より城壁のある街の方がいい。何もない一人者より，角のある妻帯者の方がいい。」と言って角を欲しがっている。この horn という語はこの AYL に何度もあらわれて，森と恋の物語を浮き上らせているようだ。他に，

I.	ii. 125–128	presence (personal appearance) –bills–presents (writings)
	ii. 145	broken music–rib–breaking
	iii. 35	hate (ate)--deserve (do serve)
II.	iv. 11– 12	bear–cross
	vii. 26– 28	hour–ripe–rot
	vii. 44– 47	weed–grow
III.	iii. 67– 68	give–gift
IV.	i. 137–140	take (catch)–commission
	iii. 68	instrument (musical)–strings

以上 AYL 中の洒落を三種に分類してみたが，先にも述べたように，ある箇所ではこれら三種は各々巧みに組み合わされ，その効果を増している。そこで最後に，そのような例を二箇所ばかり挙げてみたい。二幕四場で，フレデリック公の怒りをかったロザリンドは男装してアーデンの森へ向うが，シーリアもタッチストンを伴として，これに従うのだが，シーリアはついに歩けない程に疲れてしまう。

> Cel. I play you, bear with me; I cannot ge no further.
> Touch. For my part, I had rather bear with you than bear you; yet I should bear no cross if I did bear you, for I think you have no money in your purse.

このタッチストンのセリフには「貴女を背負ったからって，十字架を背負ったことにはなりませんや（何の功徳にもならない）。」という意味と「貴女を背負っても金を運ぶことにはなりゃしない（何の利益にもならない）。貴女の財布は空っぽらしいから。」という意味がこめられている。ここでは掛詞，縁語の性格が巧みに織り込まれて，全く巧妙な puns を見せてくれる。bear は「我慢する」と「背負う（運ぶ）」との掛詞になっており，cross はキリスト教のシンボルである十字架とエリザベス朝の銀貨の裏に十字架が彫ってあったことから，銀貨の意味との掛詞になっている。Mathew XXⅦ, 32 にも They compelled him to bear his cross とあるように，cross と bear の関連は強く，これは明らかな縁語とみることが出来る。



もう一つは Ⅲ. ii. 123－128 である。

> Ros. I'll graff it with you, and then I shall graff it with a medlar: then it will be the earliast fruit i'the country; for you'll be rotten ere you be half ripe, and that's the right virtue of the medlar.
> Touch. You have said; but whether wisely or no, let the forest judge.

オーランドウがロザリンドを恋するあまり，歌を記して木につるした，その紙片を手に当のロザリンドが今はギャニメイドという従僕に扮した姿で登場する。道化のタッチストンが彼女の恋心を盛んに冷かすと，彼女は「黙れ，鈍間の馬鹿。木につるして あったんだよ。」と男の口調で喋べる。タッチストンは「なる程，碌でもない実(紙片)のなる木だ」と弥次り返す。ロザリンド「それをお前に接木して，それからカリンの木に接いでやろう。そうすると，それはこの国のあわてものの果実になる。お前は半熟にもならぬ先に，腐ってしまうだろうからね。それが正真正銘のカリンの性質だから。」タッチストン「おっしゃいましたね。だがしかし，名文句かどうかは森に判定してもらおう。」ここの Medlar は「山樝子の一種」即ち「カリン」と称されるものらしく，「おせっかい者」の meddler に掛けて，（それをおせっかい者にくっつけてやろう。それがまさしくおせっかい者の性質なんだから。）の意味にもなる。ここでは medlar は普通の木の実よりも早く落ちる性質を持っていることから，セリフの面白味を出しているわけであるが，日本の枇杷に似ているというこの果

実が果して早熟であるかどうかは疑問である。NED によると「小さい褐色の皮をもつリンゴに似たもので，柔かく紫色になって腐ったら，食べられる果実である。常に meddler（おせっかい者）の quibble として用いられる。」となっており，I See All によると「青いころにもいでしまい，腐るまで，貯蔵しておく。」となっている。両辞書から，結局 medlar の果実は，普通の木の実が木で熟してからもぎとられるのと異なり，まだ十分熟しないうちに，もぎとられてしまう。即ち「実らぬ先にとられてしまう」という運命を荷っているものと推察される。「カリンに接木してやろう。」は（その恋が実らぬ先にもぎとられる運命にしてやろう）となる訳で，the right virtue of mdlar の内容もはっきりすると思う。またロザリンドのセリフでの you は yew（水松）と ewe（牝羊）の三つに掛けていると見られる。yew は墓場に植えられ，「悲しみ」や「死」の象徴をなすものであるから，「あたり前の生き方をしない木」即ち「まともでない道化のお前」の意を持たすわけである。ewe も同様に，「羊」のように「人間扱いを受けない道化」の意味を持っているものと考えられる。要するに，you に水松，羊を掛けて，「それをまともでないものに接ぎ合わせてやろう。(成就しない恋にしてやろう)」の意味を作り出していると見られる。複雑な要素が幾つも重なり合って大変 puns が効果的である。

以上のように，三種に分類した puns は「ごろあわせ」……13，「掛詞」……46，「縁語」……10（計約70）となり，飛躍した「掛詞」の存在を示している。

「ごろあわせ」的性格のものは13の数しか示していないけれど，シェイクスピアの作品には，実際，無数に散在しているように思われる。これは読者や観客にとって，単に語調のいい，流調なセリフとしてのみ受けとられがちなのではないだろうか。また，これは，他の二種が内容のものであるのに対して形式のものであるという面でも，未熟な我々がそれを完全に採り出すことを難しくしているようだ。

「掛詞」的性格のものは，上の jingles と違い辞典による作業で，ほとんど確実に資料を作り出せたと思っている。

「縁語」的性格のものが少いということは，jingles 同様，シェイクスピアがこの種の洒落を余り使わなかったのも事実だろうが，我々の言葉の知識の貧弱さに原因するところだろう。

今反省してみたことを考慮に入れた上でこれらを眺めてみても，明らかに「掛詞」の類は多い存在を持つに違いない。こういうことは結局，「掛詞」的性格のものが聴衆を最も喜ばし，且つ最も直接に促がした，ということを物語

っているのではないだろうか。「縁語」的性格の puns は即座の笑いを触発することが困難であろうし，また jingle も，セリフの流調さとして見逃されやすく爆笑の種としては単純すぎるようだ。このようなことからエリザベス朝の民衆が，喜劇に対して(特に puns において）どのような意向をもっていたか，納得出来る。

上述のような puns の中を縫って，最も顕著な手腕を発揮するのは，道化役タッチストン，男装のロザリンド，無為の哲人ジェイクイズでの順である。

ロザリンドの洒落は飽くまでも稚びた域を越えず，羽目をはずさない程度に終始しているようだ。つまり，AYL 全般にみられる知的な要素をもつ滑稽味というものはロザリンド及びシーリアの puns によって窺い知ることが出来る。

また，タッチストンのものは世俗哲学に通ずるもので，時には俗に超然とした普通人よりずっと賢い馬鹿擬装者であるかと思えば，時には正真正銘の馬鹿にたちかえってみせたりして，観衆に対する好意を表わさずにはおけないような，情的な滑稽味なのである。

彼等の演ずる知的なもの（wit）と情的なもの（humour）とが織りなしている要素が，要するに，日本の万才みたいなものを断然にひき離して，高い芸術価値ある作品をなす一面を作り上げているのではないだろうか。

タッチストン，ロザリンド，ジェイクイズにおける通俗性，知性，厭世性とが混淆して緑なすアーデンの森を吹き抜ける時，洒落の趣きは「快活さ」と「軽妙」さに溢れたものとなる。その軽妙・快活さは，日本の万才でいうなれば，「真面目・まとも」に対する「阿呆・脳足りん」の如き，朗らかな対照関係が対話者間でも，puns の内容においても案外な役割をもっているようである。

エリザベス朝の人々が，上述のような比較的比重の軽い puns による滑稽味を愛好したということは，当時の健全な精神的芸術的生活の一片を示してくれることになろう。